シンポジウム「巨大災害へのレジリエンスをどうとらえるか？」を開催

●大学院環境学研究科、減災連携研究センター

大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター、減災連携研究センターは、５月20日（水）、減災館において、シンポジウム「巨大災害へのレジリエンスをどうとらえるか？ビッグデータ・インフラ技術・土地利用マネジメントの統合」を開催しました。これは、文部科学省の大学発グリーンイノベーション創出事業「グリーン・ネットワーク・オブ・エクセレンス（GRENE）」環境情報分野「環境情報技術を用いたレジリエントな国土のデザイン」（GRENE-City、代表者：林同センター長）の成果報告の一環として行われたものです。GRENE 総括である小池俊雄東京大学工学研究科教授による基調講演「ビッグデータでレジリエンスをこうとらえる」では、地球規模での環境問題やレジリエントな社会の構築には、確かな情報の共有による分野間連携だけでなく、科学と社会の連携によるステークホルダーの協働が重要であることが述べられました。続いて、GRENE-City メンバーによるショートスピーチ「私はレジリエンスをこうとらえる」と、中林一樹明治大学特任教授、難波伸治名古屋市役所企画課長らが参加したパネルディスカッション「レジリエンスをどうとらえるか？」では、レジリエンスの概念、どのように確保向上していけばよいか、そのためにハードとソフトのアプローチをどう融合させるかについて活発な討論が行われ、レジリエンスについての様々な発想を分野横断的に繰り返し議論することの重要性が指摘されました。

会場の様子

展示会「建物に見る病院と医学校の歴史」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、２月13日（金）から５月29日（金）までの間、展示会「建物に見る病院と医学校の歴史」を開催しました。これは同館４階にある医学部史料室の所蔵品の中から、広く日本と西洋における病院と医学校の歴史を建物から振り返るもので、古書、絵画、図面、写真などを展示する企画です。

展示会の様子

1443年に創設された近代病院の原型といわれる施療院オテル・デュー（Hôtel-Dieu 神の家）や、16世紀のイタリアの病院は、キリスト教精神と深く結びついています。日本では、福井藩の医学所 済世館が1805年に創設され、医学教育と研究を行いました。

名古屋では、尾張藩医師総取締の浅井家が邸内に建てた私塾を1831年に医学館と改称し、毎年、春と秋に医師試験を行いました。1871年（明治４年）、洋医学校を名古屋にも設立すべき、という洋学者伊藤圭介らの建議により、名古屋藩は、評定所跡（名古屋市中区丸の内３丁目）に仮病院を、本町通りを挟んだ西側の奉行所跡に仮医学校を設置しました。その後、医学講習場などを経て、1914年に、愛知県立医学専門学校・愛知病院は、現在の医学部・附属病院がある鶴舞キャンパスへ新築移転し、2014年に移転後100周年を迎えました。展示では、「愛知県公立病院癲狂室復元図」（1880年）、「愛知医学校前面の図」（1884年）、「記念写真帖：創立五拾週年昇格祝賀」（1920年）、「空襲による被災と応急復旧写真」（1945年頃）、「医学部附属病院整備計画図」（1955年頃）など、それぞれの時代を象徴する建物の図や写真が多くの来館者の関心を集めました。

第61回博物館コンサートを開催

●博物館

コンサートの様子

博物館では、５月30日（土）、第61回博物館コンサート「宇宙からのメッセージ　フルート・キーボードのアンサンブル」を開催しました。当日は265名の聴衆を迎え館内は満員となりました。今回は、現在開催中の特別展「関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡」の関連企画として、演奏の前に展示の紹介が行われました。

「民謡ファンタジー（モルナール）」から始まった全７曲の演奏は、観客を透き通ったフルートの音色とキーボードの多彩な音の世界の虜にしました。また、初めは少し緊張ぎみに聴いていた方も、日本の曲メドレーでは、観客と演奏者が一体となって歌う場面もあり、リラックスして十分に楽しんでいる様子でした。コンサート後には、「とても良かった、今度はいつコンサートがあるのか」、「キーボードはいろいろな音を作るんだね」、「ただ聞いているだけではなくて、一緒に参加できると楽しいよ」、「草笛のフルートは味があった」などの質問や感想が寄せられました。

キャンパス講座「達人と話そう」を開催

●博物館

講演する澤木名誉教授

博物館では、５月９日（土）から６月13日（土）までの間、全４回にわたり、「達人と話そう～祝・ノーベル賞受賞～」を開催しました。これは、名古屋市教育委員会生涯課との連携事業「キャンパス講座」として行われ、名古屋産業技術研究所（名産研）の共催を得て開催しており、６年目となる今回は延べ330名の参加がありました。今回は講師として、足立　守 PhD 登龍門推進室特任教授、澤木宣彦名誉教授、竹田美和名誉教授、水谷宇一郎名誉教授の４名を招き、昨年のノーベル物理学賞の受賞テーマである青色発光ダイオード関連の講演を行いました。一般の方に科学の話をするのは、話す方も聴く方も大変ですが、講師の努力と探究心旺盛な参加者によって、充実した企画になりました。参加者からは「ちょっと難しすぎた内容もあった。ノーベル賞の授賞式の写真がたくさんあって、臨場感があった。LED の歴史が良くわかった」などの感想が寄せられました。

第110回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

講演する田代准教授

減災連携研究センターは、５月21日（木）、減災館において、第110回防災アカデミーを開催しました。今回は、田代　喬減災連携研究センターライフライン地盤防災寄附研究部門准教授が「東海地方が抱える気象災害リストとその減災対応」と題して講演を行い、65名の参加がありました。講演では、1959年の伊勢湾台風や2000年の東海豪雨の様子を振り返りながら、日本列島はこうした気象災害リスクがもともと高い上に、濃尾平野では地盤沈下の影響もあってさらに厳しい条件下にあること、気候変動や都市化の影響でリスクが年々増していることが紹介されました。ゲリラ豪雨では短時間の集中的な雨で排水機能が麻痺して内水氾濫が起きたことが紹介され、こうした状況を正しく把握するには10分雨量が有効であることが指摘されました。浸水には地形が大きく影響していることも述べられ、これから梅雨の季節を迎えるにあたって身近なところに潜むリスクを改めて認識する機会となりました。